

正倉院御物銘文集

松 島 順 正

正倉院御物は明白な日附をもつ献物帳と共に存在していて、その詳細な色目特徴などの記載によつて、当時の名称、伝来、技術等が知り得ることと、献物帳以外のものについても、その付札により、またはそのもの自体に書付いたり、彫りつけた銘文によつて献納の日や使用の時を明らかにすることができることが、その特質の一として指摘されている。ここに集録した銘文集は、献物帳所載の御物については、更にそのものに記載する銘文や日附などによりその内容と献物以前の絶対年度を明らかにすることができると共に、献物帳に記されていない事項を詳らかにするものである。また献物帳以外のものについては前述のとおり献納の日や使用の時が明らかにわかり、それらの御物の由つて来るところを理解する上に重要な役割を果すものである。

この銘文集はさきに発表した正倉院古製銘文集成と姉妹の関係にあるものであつて、互に相関連し、両篇を合せ見るなれば始めて正倉院御物の殆んどすべての銘識に接し得るものである。

本文登載の順序は主として左記により配列することとした。

1、献物帳記載の御物及び同関係品

2、天平勝宝四年四月九日大仏開眼会関係品

イ、開眼用品

ロ、開眼会に当り人々献納品

3、天平勝宝五年三月廿九日仁王会関係品

4、天平勝宝七歳七月十九日中宮御斎会用品

5、天平勝宝九歳五月二日聖武天皇御一周忌用品

6、天平宝字二年正月子日及び卯日儀式用品

7、天平神護三年二月四日及び神護景雲二年四月三日称徳天皇献納関係品

8、其他

一、献物帳所載の御物及び同関係品

雑 集

巻尾墨書「天平三年九月八日寫了」(図版第二十二上)

楽 毅 論

標題墨書「楽毅論紫微中臺御書」

巻尾墨書「天平十六年十月三日

藤 三 娘

円 鏡第二号

紙箋墨書「圓鏡一面重大卅三斤八両 緋繩帶 八角 楓杵盛」

八角 鏡第三号

紙箋墨書「八角鏡一面重大十三斤十五両 緋繩帶 八角 楓杵盛」

八角 鏡第四号

紙箋墨書「八角鏡一面重大十四斤十五両 緋繩帶 八角 楓杵盛」

円 鏡第十一号

紙箋墨書「圓鏡一面重大三斤十二両 緋繩帶 平螺鈿背 緋繩帶」

八角 鏡第十三号

紙箋墨書「^(八角鏡)面重大三斤四両 緋繩帶 平螺鈿背 緋繩帶」

円 鏡第十五号

紙箋墨書「圓鏡一面重大六斤五両 緋繩帶 花鳥背 緋繩帶」

八角 鏡第十六号

紙箋墨書「八角鏡一面重大六斤一分 緋繩帶 紫皮箱 緋綾囃盛」

円 鏡第十八号

紙箋墨書「圓鏡一面重大四斤十五両 緋繩帶 紫皮箱 緋綾囃盛」

鏡十八面の中、献物当時の題箋を存するもの八面、献物帳記するところと全く同文でしかも筆者も同一である。以て献納当時付せられたことが知られる。但し第十五号鏡及び第十八号鏡の二面は雑物出入帳によれば弘仁十三年三月廿六日出蔵のことが見え、かつ鏡背の文様にも疑問の点があるから題箋

円 鏡第六号

の鏡に当るか否かは姑く疑を存しておく。

銀平脱銘「距如、随、堅鏗」

金銀平脱背鏡の外区に沿い銀平脱を以て詩文を表はしたものであろうが破損甚しく欠失のところが多く僅かに数字を存する。この鏡は他の七面と共に寛喜の盗難に会い毀損したもので、後宝庫に還納、明治に至り修理されたが、本鏡は功未了のものである。

鳥毛篆書屏風

鳥毛篆書、吹絵楷書

「主 無 獨 治

臣 有 賛 明

箴 規 苟 納

咎 悔 不 生

明 王 致 化

務 在 得 人

任 愚 政 亂

用 哲 民 親

近 賢 無 過

親 佞 多 惑

見 善 則 遷

終 為 聖 德」

(図版第二十二下)

鳥毛を貼つて篆書を現わし、吹絵抜きにした楷書をこれに配している。も

と六扇を接扇で連繫したものであつたが、元祿及び其以後の修理に当り旧接扇を脱し紐を以て各扇を繋いだ。文の順序に疑問のあるのは或は修理の際その順序を誤つたものであろうか。

鳥毛帖成文書屏風

鳥毛楷書

「種好田良易以得穀

君賢臣忠易以至豊

諂辭之語多悦會情

正直之言倒心逆耳

正直為心神明所祐

禍福無門唯人所召

父母不愛不孝之子

明君不納不益之臣

清貧長樂濁富恒憂

孝當竭力忠則盡命

君臣不信國政不安

父母不信家道不睦

琴箏絃殘闕付屬木牌

第一号墨書(表)「琴絃」(背)「白」

第二号墨書(表)「琴絃」(背)「斑」

第三号墨書(表)「中絃五」(背)「小絃五」

第四号墨書「箏絃」

天平勝宝八歳七月廿六日の献物帳に「銀平脱梳箱壹合盛、阮咸絃四條、琴絃十四條、箏絃十三條、琵琶絃四條、五絃琵琶絃五條、中絃五條、小絃五條」とあるものの、殘絃と推定せられるものに付する木箋に墨書する銘である。今この殘絃を納むる銀平脱合子は献物帳謂う所の「銀平脱梳箱」には当らないようである。

人勝殘闕雜張

黒漆書「令節佳辰

福慶惟新

變和万載

壽保千春」

(図版第二十三上)

齊衡三年六月二十五日雜財物実録に「人勝二枚、一枚在金薄字十六云々」とあるものに当る。方形に截つた浅緑羅の上に黒漆にて劃線を引き文字を現わす。もと金薄を漆で押したものであつたが、金箔は殆んど剝落して微かにその痕跡を止めるに過ぎない。文中の「變」は「變」の誤であらう。人勝は雜財物実録によれば天平宝字元年閏八月廿四日の献物である。

金銀平文琴

背銀平文銘

「琴之在音 邊滌邪心

雖有正性 其感亦深

存雅却鄭 浮侈是禁

條暢和正 樂而不淫」

(図版第二十三下)

腹内竈池墨書

「清琴作兮□□日月幽人間兮□□」

同 鳳池墨書

「乙亥之年

季春造作」

献物帳に載せる銀平文琴一張は弘仁五年十月十九日出蔵せられ、同八年五月二十七日にこの金銀平文琴と相替えて還納されたことが雑物出入帳によつてうかぶ。しかしその製作手法文様などより推して唐代の作であることは疑う余地はない。蓋し乙亥之年は唐開元二十三年に当てて大過なからう。

白石鎮子

青竜朱雀 裏面墨書「須彼天馬」

玄武白虎 裏面墨書「阿斯大无沙」

子 丑 裏面墨書「須彼大馬□□□」

辰 巳 裏面墨書「秦司」

午 未 裏面墨書「山伐一鳥」?

戌 亥 裏面墨書「山伐山伐」

墨書は何を意味するか詳らかでない。また鎮子の名称は当らないようである。

赤漆小櫃附属木牌

墨書「第廿九横」

延暦十二年六月十一日曝涼使解には第廿九櫃收納物として青両面褥一床及び緑繩三幅帳一条を載す。これは献物帳所載の御床の褥と覆を指すものである。褥は伝わらず御床覆一条をこの櫃に納めてある。

赤漆小櫃附属木牌

墨書「第卅小横」

延暦十二年曝涼使解には「第卅小横收納、青斑鎮石十挺」とある。今旧に

依り青斑鎮石十挺を納む。

雑物出入継文

往来墨書「雙倉北継文」

出 蔵 帳

往来墨書(表)「御劍出」(裏)「天平寶字三年」

出 入 帳

往来墨書(表)「雙倉北物用帳」(裏)「東大寺天平勝寶八歳始」

雑物出入帳

往来墨書(表)「雑物下帳」(裏)「雙倉」

雑物出入継文以下の文書は宝庫御物の出入を証すべき文献である。

二、天平勝宝四年四月九日大仏開眼会

関係品

イ 開 眼 用 品

伎 楽 面

第一号 内面中央墨書「婆羅門」

第二号 児 右耳裏墨書「師子」

第三号 右頬裏墨書「□羣」

第四号 同 「隨羣□」

第五号 同 「隨羣」

第六号 同 「隨羣」

第七号	同	「隨羣」	第二十六号	同	「前」東大寺 將李魚成作 天平勝寶四年四月九日
第八号	同	「胡論」	第二十七号	同	「前」東大寺 將李魚成作 天平勝寶四年四月九日
第九号	児内面墨書	「天」太孤兒上野	第二十八号	右頬裏墨書	「作大田和鷹」功七人
第十号	児内面墨書	「讚岐」大孤	第二十九号	左頬裏墨書	「作大田倭鷹十日作了」
第十一号	女同	「笑」少女	第三十号	右頬裏墨書	「九年七月」作大田和万呂 功七人
第十二号	右頬裏墨書	「讚岐」	第三十一号	右頬裏墨書	「作大田倭鷹」功五人九年五月
第十三号	同	「讚岐」	第三十二号	右頬裏墨書	「作苾坂福貴」功九人
第十四号	同	「周防」	第三十三号	右頬裏墨書	「作」功八人
第十五号	左頬裏墨書	「相模国」	第三十四号	左頬裏墨書	「後」天平勝寶四年四月九日
第十六号	内面墨書	「東大寺財福師 (別筆)夷作」	第三十五号	内面墨書	「前」東大寺 天平勝寶
第十七号	女右頬裏墨書	「基永師作」	第三十六号	左頬裏墨書	「天」天平勝寶四年四月九日
第十八号	右頬裏墨書	「基永師作」	第三十七号	内面墨書	「第五」東大寺 基永師作 天平勝寶
第十九号	右頬裏墨書	「大日師作」	第三十八号	同	「東大寺」後
第二十号	左頬裏墨書	「捨目師作」	第三十九号	右頬上裏	「東大寺」
第二十一号	同	「捨目師作」			
第二十二号	同	「延均師」			
第二十四号	力士内面墨書	「前」東大寺 將李魚成作 天平勝寶四年四月九日			
第二十五号	同	「前」東大寺 將李魚成作 天平勝寶四年四月九日			

- 左 頬 上 裏「左」
- 第四十号 内面墨書「東大寺」
左
- 第四十二号 同「東大寺」
- 第四十三号 同「東大寺」 作将李
天平勝寶四年四月九日
- 第四十四号 同「東大寺」 延均師
天平勝寶四年四月九日
後一
- 第四十五号 左 頬 裏 墨 書「相□國」
(模カ)
- 第四十八号 鬼 内面墨書「喜應□」
- 第四十九号 右 頬 裏 墨 書「隨 群」
- 第五十号 力士 右 頬 裏 墨 書「力 士」
- 第五十七号 内面墨書「東大寺延均師」
- 第六十二号 同「東大寺□均師」
- 第六十八号 右 耳 裏 墨 書「隨 羣」
- 第七十九号 鬼 左 耳 下 裏 墨 書「為首出史」
- 右 耳 裏 墨 書「□□□」 (不明)
- 第八十号 鬼 左 耳 下 裏 墨 書「太 □」
- 第八十二号 内面墨書「東大寺」
「東大寺延□□」
- 第八十六号 同「東大寺」
- 第八十九号 同「東大寺」
- 第九十二号 左 頬 裏 墨 書「延 彫」

- 第九十七号 帽子左側墨書「秋 田」
- 第一百八号 鬼 右 頬 表 墨 書「逮」
- 第一百七号 右 頬 裏 墨 書「周 防」
- 第二百二十四号 師子頭部左内面墨書「周 防」
「前一□相□」
- 第三百三十三号 内面墨書 東大寺 将李魚
六年 成作
天平勝寶四年四月九日
- 乾 第一号 右 頬 裏 朱 書「相李魚成作」
- 乾 第二号 内面朱書「東大寺」
- 乾 第二十四号 内面朱書「東大寺」 相李魚成作
天平勝寶四年四月九日
- 伎楽面はその数百七十一口、その中乾漆造のものは三十六口で他はすべて木造である。いづれも天平勝寶四年四月九日の大仏開眼会に使用されたものと思われる。銘識の読み得るもの六十数口、各々内面に墨書又は朱書を以て面の名、作者名、年号、国名等が記されてあつて、伎楽の構成、面の作者などが知られ、中でも「功七人」「功五人」等記するものはその製作の功程を知るものとして興味深い。その国名を記するものは、それぞれの国から大仏開眼会に当り献納されたものであろうか。
- 唐古楽破陳樂大刀 二口
- 各区上刻銘(表)「東大寺」(裏)「破陳樂」
(陳)
- 各棟刻銘 「天平勝寶四年四月九日」
- 唐古楽武王大刀
- 区上刻銘(表)「東大寺」(裏)「武王」
- 棟刻銘 「天平勝寶四年四月九日」

度羅樂婆理大刀

木刃区上墨書(表)「東大寺」(裏)「婆理」

吳樂木笏

墨書「東大寺前一」天平勝寶四年四月九日「文人」

雜染桑木阮咸

槽刻銘「東大寺」

金銅雲花形裁文

刻銘「東大寺 高笠万呂作

天平勝寶四年四月九日

(図版第二十四上)

六花形花座殘闕

背墨書「七茎金銅花座

天平勝寶四年四月九日

開眼縷

紙箋墨書「開眼縷一條 重一斤二兩大
天平勝寶四年四月九日」

天平宝物筆

管刻銘「文治元年八月廿八日開眼

法皇用之 天平筆」

天平宝物墨

貼箋墨書「

□□□

開眼法皇用之天平寶物」

文治元年八月廿八日の大仏開眼に当り後白河法皇が天平宝物の筆墨を用い

て親ら開眼せられたことが知られる。

柳箱

三口、各縁墨書「東大寺 天平勝寶四年四月九日」

一口、縁墨書「銅」「東大寺 天平勝寶四年四月九日」

礼冠殘闕付属木牌

墨書(表)「納礼服二具」具太上天皇第三横
具皇太后第三横

(裏)「天平勝寶四年四月九日 第三横」

太上天皇(聖武)、皇太后(光明)が大仏開眼会に召された御礼服を納めた櫃の牌である。御礼服は今伝らず、櫃もまた送したものか、或は宝庫に残る多くの天平辛櫃の中に存するのかわ尋ねべくもない。この牌は礼冠附属のものでないが仮りに礼冠殘闕中に納めてある。

口 開眼会に当り人々献納品

密陀彩絵箱第十四号

盖表貼紙墨書「納丁香膏木香
會前東大寺」

白葛箱

縁墨書「東大寺會前」

盖貼紙墨書「納雜帶并刀子」

瑪瑙坏小

貼紙墨書「馬瑙坏一口 々周九寸七分
重十兩三分」

漆小櫃

木札墨書(表)

馬瑠坏二口 水精玉五枚
「納白瑠璃高坏一口 雜香六委」
練金十一枚

(裏)「天平勝寶四年四月九日 第一横」

大仏開眼会の献物である。納品中今存する馬瑠坏二口(一口は前掲のもの)
水精玉五枚、白瑠璃高坏一口は木札記載の品にあたるものであらう。

銀合子

身内底墨書「六両二分小」

蓋裏墨書「五両三分小」

赤漆欄木小櫃

蓋裏貼紙墨書「不知獻者
銀合子一合 銀鋸一口 居黒柿臺
八曲坏二口 十曲坏二口 銀盤一口」
居黒柿櫃 天平勝寶四年四月九日

(図版第二十四下)

題箋記載中今存する前件銀合子一合、黒柿台及び黒柿櫃がこれに当るものであらう。

琥碧誦数第一号

附属箱紙箋墨書「琥碧誦□一条

□□献物」

琥碧誦数第五号

紙箋墨書「大會後物 人々献物」

琥碧誦数第十三号

附属木牌墨書「橘夫人奉」

附属柳箱貼紙墨書「琥碧誦数一條
會前献物」

雄玉誦数第十四号

紙箋墨書「雜玉 不知獻者
會日」

犀角把白銀葛形鞘珠玉莊刀子第七号

木牌墨書「橘夫人奉物」

密陀彩絵箱以下はそれ／＼大仏開眼会に当り人々の献物及びその容器に附せられた銘識である。文中会日、会前、会後は開眼会日及びその前後の献物を意味するのであらう。

献物 牌木製

一枚、表墨書「藤原朝臣 久米」

裏墨書「刀自賣献舍那仏」

一枚、墨書「從三位 藤原朝臣吉日」

一枚、墨書「橘少夫人」

一枚、墨書「橘夫人」

一枚、墨書(表)「藤原朝臣袁比」(裏)「良實獻遮那佛」

一枚、墨書「藤原朝臣百能」

一枚、墨書「尼信勝」

一枚、墨書「尼善光」

献物紙箋

墨書「氣多十千代獻」

献物牌及び紙箋はそれぞれの献物に附せられていたものであらうが、惜むらくは物と札とが相離れて知る由もない。

三、天平勝宝五年三月廿九日仁王会関係品

牙 牌

金書(表)「仁王會獻盧舍那

佛淺香壹村」

(図版第二十五左)

(裏)「天平勝寶五年歲

次癸巳三月廿九日」

(図版第二十五中)

銘記のとおり天平勝寶五年三月二十九日仁王会に当り大仏に献納された浅香一材に附された牙牌である。今仮りに北倉にある全浅香の附牌として置かれてあるが、この香木が献物帳所載の全浅香に宛てるとすればその量目において多少の疑問があるし、附牌記するところの浅香はその斤量が記されていないからその大きさを知ることとは出来ない。しかしこれ程の牙牌を附した浅香はかなりの大木であつたことは想像されよう。

天平勝寶五年三月廿九日の仁王会のこととは続日本紀に「三月庚午於東大寺、設百高座講仁王經、是日飄風起説教不竟云々」とある。

金字牙牌

金書(表)「平城宮御宇中太上天皇恒持心經」

(背)「天平勝寶五年歲次癸巳三月廿九日」

この日付も仁王会の日である。心経は伝わらない。

四、天平勝寶七歲中宮御齋会用品

磁 皿

甲第十一号底裏墨書「戒堂院聖僧供養盤天平勝寶七歲七月十日」

(九)

東 大 寺」

甲第十二号底裏墨書「僧供養盤」

乙第一号底裏墨書「戒堂院聖僧供養盤」

花 籠円形

東 大 寺」

底裏墨書「中宮齋會花苞」

天平勝寶七歲七月十九日

東 大 寺」

(図版第二十六下左)

同 方形

蓋及身縁墨書「中宮齋會花苞 天平勝寶七歲七月十九日 東大寺」

天平勝寶七歲七月十九日は聖武天皇の御生母藤原宮子の周忌に当る。この日東大寺において御齋会の儀を行われたことが知られる。

五、天平勝寶九歲五月二日聖武天皇

御一周忌用品

花 籠円形

底裏墨書「東大寺

天平勝寶九歲五月二日」

(図版第二十六下右)

花 籠円形

底裏墨書「東大寺花苞」

花 籠円形

底裏墨書「東大寺花籠」

宝庫に存する花籠五百六十余口、いずれも表皮を去つた竹で編んだ箆様のもので、その大なるものは径一尺五寸、小なるものは径一尺余であるが、径一尺四寸位のものが最も多い。また皿の如き浅形のものもあれば鉢のやうに深いものもあつて大小深浅一様でない。銘記によると前掲の天平勝寶七歲七

月十九日中宮齋会に使用されたものと、天平勝宝九歳五月二日の聖武天皇周忌御齋会のものがあり、単に「東大寺花苞」又は「東大寺花羅」と記するものも少くない。また別に方形の竹編花宮が残闕ながら十口ばかりあり蓋を具す。前掲の中宮御齋会の花籠方形がこれである。更にまた「東大寺花苞」と墨書する長方形の柳箱が三十数口存する。これと同形のもので異つた墨書あるものを左に掲げる。

一口「方一尺三寸」「花苞」

三口「東大寺會前」

一口「東大寺」

一口朱書「納入勝箱」

金銅鎮鐸

第一号刻銘「東大寺枚幡鎮鐸 頂部刻銘「一」

天平勝宝九歳五月二日」

第二号刻銘「同 文」 同 「二」

第三号刻銘「同 文」 同 「三」

第四号刻銘「同 文」 同 「五」

第五号墨書「東大寺枚幡鎮鐸 同 「七」

天平 「」

第六号刻銘「第一号と同文」 同 「八」

第七号刻銘「同 文」 同 「十一」

第八号刻銘「同 文」 同 「十二」

第九号刻銘「同 文」 同 「十三」

第十号刻銘「同 文」

六、天平宝字二年正月子日及び卯日

儀式用品

子日手辛鋤 二口

各柄墨書「東大寺 子日獻 天平寶字二年正月」

三十足几第十七号

脚墨書「卯日御杖机 天平寶字二年正月」

正月初子の日に天子籍田を耕し、皇后蚕神を祭り、初卯の日に卯杖を以て悪鬼を払ふことは中国より伝わつた儀式である。宝庫には手辛鋤のほか目利箒及びそれ等に附屬する覆、帶、机褥等が残つて居り、卯杖としては南倉にある椿杖が当てられる。

七、天平神護三年二月四日及び神護景雲

二年四月三日称徳天皇献納関係品

銀 壺 二口

甲、底裏刻文

「東大寺銀壺 重大五十五斤 甲

蓋實并臺惣重大七十四斤十二兩

天平神護三年二月四日」

同、台刻文

「東大寺 銀壺臺 重大十二斤 甲」 (図版第二十六上)

乙、底裏刻文

「東大寺銀壺 重大五十二斤

蓋實并臺惣重大七十二斤十二兩

天平神護三年二月四日

同、台刻文

「東大寺 銀壺臺 重大十斤八兩 乙」

続日本紀に天平神護三年二月四日称徳天皇東大寺に幸して國中連公麻呂等に位を進められた事を記す。この銀壺はその時の献物であつたことが知られる。

黄楊木几第一号

裏面墨書「大仏殿」

碧地彩絵几第十五号

裏面貼箋墨書「大仏殿献物」

題箋蠹喰して闕失のところが多いが本几に具する褥に「長一尺七寸 廣一尺二寸 以神護景雲二年四月三日 幸行献大仏殿東大寺」の墨書がある。蓋し前件黄楊木几と共にこの日行幸の際の献物の几であろう。

八、其他

詩 序

卷末墨書「用絹貳拾玖張

慶雲四年七月廿六日」

墨

第八号 表陽刻文「華烟飛龍鳳皇極貞家墨」

裏朱書「開元四年^{丙辰}秋作貞□□□□」

第九号 陽刻文「新羅楊家上墨」

第十号 同 「新羅武家上墨」

漆柄香炉箱納白銅柄香炉

蓋表線刻「初 神龜六年七月六日」

最勝王經帙

織文「依天平十四年歲在壬午春二月十四日勅

・天下諸国每塔安置金字金光明最勝王經」

続日本紀によれば金字金光明最勝王經を諸国每塔に安置せしめる勅を出されたのは天平十三年三月乙巳（二十四日）となつてゐる。

華嚴經論帙

紙標題書「華嚴經論第一帙」

華嚴經論は北魏の僧靈弁の選述で全百卷、華嚴經を注釈したものである。殆んど散逸して今伝写されたもの僅かに数本にすぎない。この帙内に貼付する文書は我が天平勝宝年間と推定せられる新羅の戸籍、計帳の断簡であつて貴重な資料であるばかりでなく本帙が經論と共に或は朝鮮より舶載せられたものではあるまいか。

灌頂天蓋骨

墨書「大弁才天女天并四角小灌頂」

「天弁才天女壇」

古製銘文集成に掲げた赤綾天蓋（残片）の骨である。同銘文により天平勝宝六年五月三日に造立された大弁才天女像の天蓋であつたことが知られる。灌頂天蓋八旒に相当する骨が保存されている。

胡 祿

第二号 納箭竹刻文「下毛野那須郷全二」

第八号 木牌墨書「勿他用」

第十一号 同 (表)「矢一柄」木工衣縫大市所給如件

(裏)「天平寶字八年九月十四日」

この日附は宛も恵美押勝乱を興してより四日目に当る。押勝謀反の日即ち九月十一日には安寛法師を遣して宝庫所納の一切の兵器を出蔵して乱に備へたことが記録にあるが、この胡祿もまた木工衣縫に給したことが墨書に見られる。但し献物帳所載の胡祿でないことは、その色目が献物帳と合はないこととで明らかである。この胡祿及び今御庫中倉に蔵する武器類は共に入庫の由来が詳かでない。

屏風殘闕 二扇

一扇 鳥毛篆書「唯行不易」

一扇 鳥毛楷書「正直為心神明所祐 禍福無門唯人所召」

この鳥毛屏風殘闕は献物帳所載のものではない。蓋しかやうに鳥毛屏風は他にもあつたものであらう。

褙衣 香

包紮墨書「重小六両

神護景雲二年四

月廿六日」

鉄 針

紙箋墨書 (表)「鐵針一隻長一尺一寸六分重二両三分」

(裏)「糸長一千一百卅六尺」

銅 針

紙箋墨書 (表)「銅針一隻長一尺一寸六分重三両小」

(裏)「糸長一千一百卅五尺」

銀 針

紙箋墨書 (表)「銀針一隻長一尺一寸六分重三両三分小」

(裏)「長糸^{（？）}一千一百卅四尺」

緑麻紙針裏

墨書「緑淡棧糸一條^{重二両二分大}鐵針一隻」

針の長さ各一尺一寸余、実用のものとは思はれない。恐らく七月七日の乞巧奠に用いられた儀式用品であらう。

碧地金銀絵箱 第廿四号、第廿五号

各裏墨書「千手堂」

蘇芳地金銀絵箱 第廿六号

台座裏墨書「東小塔」

蘇芳地金銀絵箱 第廿七号

床脚裏墨書「東小塔」

黄楊木金銀絵箱

底裏墨書「東塔」

白檀八角箱

底裏墨書「吉祥堂」

黒柿蘇芳染金絵長花形几 第四号

背墨書「戒壇」

粉地金銀絵八角几 第五号

背墨書「吉祥堂」

粉地金銀絵八角長几 第六号

背墨書「東小塔」

(別筆)
御飭」

粉地銀絵花形几 第七号

背墨書「東小塔」

粉地彩絵几 第九号

背墨書「東塔」

粉地彩絵几 第十号

背及貼紙並墨書「千手堂」

蘇芳地彩絵几 殘闕

背朱書「千手堂」

金銀絵長花形几 第十九号

背墨書「東小塔」

金銅六角盤

裏墨書「東小塔」

刻彫梧桐金銀絵花形合子

第一号 身底裏墨書「戒壇」

第二号 同 「戒壇堂」

檜和琴 二張

各底板墨書「羅索堂」

檜和琴

裏板木面銘「東大寺」

桐木琴 殘闕(準)

裏板刻銘「東大寺」

新羅琴 殘闕

槽裏刻銘「東大寺」

螺鈿楓琵琶

槽刻銘「東大寺」

仮斑竹竿

匏底刻銘「東大寺」朱を嵌む。管刻銘「東大寺」

仮斑竹笙

管刻銘「東大寺」朱を嵌む。

呉竹尺八

刻銘「東大寺」墨書「東大寺」

斑竹横笛

刻銘「東大寺」

漆鼓 胴 十九口

各刻銘「東大寺」

黒柿転手楽器 殘闕の内

刻銘「東大寺」乙 天平勝寶二年正月十七日」

螺鈿筭篋

柄螺鈿銘「東大寺」

斑犀如意

刻 銘「東大寺」朱を嵌む。

斑犀如意箱

刻 銘「東大寺」

斑犀如意紫檀白牙荘

掌内面及尾並刻銘「東大寺」朱を嵌む。

銀 鉢

第一号 刻銘「重大五斤四両」台刻銘「重大一斤七両」台墨書「南鐐」

第二号 同 「重大五斤六両」同 「重大一斤八両」

第三号 同 「重大五斤一両」同 「重大一斤七両」^八

第四号 同 「重大四斤七両」同 「重大一斤八両」

銀 鉢

刻文「重大五斤五両 延喜十四年十二月十一日別當大法師智愷住時作

入」

銀 盤

第一号 底裏刻銘「重大三斤三両」

第二号 同 「重大三斤四両」

第三号 同 「重大三斤八両」

銀 盤

底裏刻銘「重大三斤二両」

銀 合 子

甲 蓋裏墨書「六両三分小」

乙 同 「六両二分小」

金銀花盤

背点刻「字字号二尺盤一面重一百五両四錢半」(図版第二十五右)

背線刻「東大寺花盤重大六斤八両」

表墨書「四 斤」

金銅水瓶鳥頭口

胴部墨書「十三両三人」^(分)

金銅大合子

甲 身底裏刻文「左十五」

丙 同 「左四」

丁 同 「左二」

金銀匙

柄裏刻文「重大三両」

佐波理皿

その数実に六百九十七口、銘記あるものが多い、銘文には針書、墨書、朱書の三種がある。

墨書 一口「口径五寸六分 重九兩大」

天平勝寶五年六月十六日檢定」

一口「口径八寸四分 重一斤大」

天平勝寶五年六月十六日檢定」

其他「土」「于生」「三北」「東大寺」「靈」「諸公」「大郎」「万

吉」「為水采」「今一得」「一番」「二番」「六番」「七番」

「八番」「三」「九」「十」「千」「万」「真」「天」「人」

「東」「茂」「策」「水」「元」「吉」「坐」「キ」「安」

「大」「乙」「瀾」「上」「和」「相」「風」「石」「太」

「舍」「行」「言」「弓」「得」「上」

朱書「大坛」「三坛」「四坛」「辰」「陽」

針書「凶王」「僧林師」「供」「七」「東寺」「東大寺」「真淨」

佐波理加盤

第一号 (十重加盤)

蓋墨書「十重」「用盤五」「八重」

第二号 (十重加盤)

蓋墨書「十重」「八重」

第三号 (九重加盤)

蓋墨書「九重」「内用盤五」「卅」

同針書「代一九重」「代一」

鏡針書「代一九重」「代二」「代三」「代四」「代五」「代六」

「代七」「代八」「代九」

代は戊であらう。

第四号 (九重加盤)

蓋墨書「九重加盤」一口

同針書「甲一九重」

鏡針書「甲一」「甲二」「甲三」「甲四」「甲五」「甲六」「甲七」

「甲八」「甲九」

第五号 (九重加盤)

蓋墨書「九重加盤」一口「九重」

同針書「庚一九重」

鏡針書「庚一九重」「庚二」「庚三」「庚四」「庚五」「庚六」「庚

七」「庚九」第八重針書なし。

第六号 (九重加盤)

蓋墨書「九重加盤」一口「九重」

鏡針書「己三」「己四」「己五」「己六」「己七」「己八」「己九」

第一重及び第二重針書なし。

第七号 (八重加盤)

蓋墨書「八重加盤」一口「十重加盤」

第八号 (八重加盤)

蓋墨書「八重加盤」一口

第十号 (加盤殘闕)

蓋墨書「七重加盤二口」

鍔針書「乙二」「乙三」「乙六」「乙七」「乙八」「乙九」「乙十」

第一、第四、第五重並に闕く。

第十一号（十重加盤殘闕）

蓋墨書「九重」

同針書「丁一十重」

鍔針書「丁三」「丁七」「丁八」「丁九」「丁十」

第一、二、四、五、六重並に闕く。

第十二号（加盤殘闕）

蓋墨書「五重」

鍔針書「五」

第十三号（加盤殘闕）

蓋墨書「十重」
「加盤二口」

鍔針書「丙五」「丙六」

第十四号（加盤殘闕）

鍔針書「辛六」「辛七」「辛八」

この外加盤殘闕の鍔數百口を算へる。五重、四重、三重等に重ね合すことが出来る。墨書銘及び針銘を有するものが多い。銘文は組の符合であらう。左に掲げる。

墨書「同」「△」「大」「天」「尺」「分」「方」「土」「即」

「比」「良」「人」「无」「一」「三」「四」「五」「六」

「七」「八」「九」「十」「唐金鉢五組大」

針書「汜陵」「行側」「毛」「十三」「策」「田」「針」

又給具用鍔として使用したもので金銀泥の附着するものが數口ある。銘識を掲げると次のとおりである。

一口墨書「重五兩一分大」

一口墨書「自内裏来着銀墨奉写心経料」

針書「十三兩二分」

貼箋墨書「鏡重小十三兩二分」

一口貼箋墨書「銀湊大十兩二分」

鏡重三兩二分一朱大」

八角鏡

刻銘（双鈎体）「隻影嗟為客孤鳴復幾春初成照瞻鏡遙憶畫眉人舞鳳埽林近

盤龍渡海新絨封待還日披拂鑒情親」

円 鏡第三十一号

鑄銘「長相思 毋相忘 常貴官 樂未央」

金銅火舍付属木札

墨書（表）「定坐火爐壹合舊肆合右依員檢納如件」

（裏）「五月廿三日史生河内豊継」

漆金薄繪盤 一雙

各台裏墨書「香印坐」

漆香盆

底香台（線刻）「圖書寮」（墨書）「香水」

瑇瑁如意

紙箋墨書「瑇瑁如意一枚自上所給下」

素木如意箱

刻文「東大寺」

墨書「福安立奉如意」

漆皮箱

蓋貼紙墨書「〔第〕納練金
弟一革莒」

漆皮箱

蓋貼紙墨書「寺入」

赤漆履箱

貼箋墨書「第五横」

磁鉢

乙第九号内側墨書「致印」

丙第一号底裏墨書「訓

黒〔分色〕

槻弓

第四号 本弭胡粉書「東大寺」

第七号 上弭 「東大寺」

第九号 本弭胡粉書「東大寺」

第十三号 本弭針書「左」

第十五号 兩弭針書「右」

第十八号 本弭針書「千」

第二十六号 本弭胡粉書「東大寺」

第二十七号 兩弭針書「右」

箭

第廿二号 管纏下針書「茨木」

經帙牌

第一 木牌墨書(表)「灌頂」(裏)「第三」

第二 同 (表)「初帙大乘部」(裏)「大方等大集經」

第三 同 (表)「大乘雜經第十四帙」(裏)「信力入印法門經等九卷」

第四 同 「釋子目錄上帙十卷」

第五 牙牌金書 「賢聖集雜第二帙」

第六 木牌朱書 「第一」

第七 同 「第四」

第八 同 「第五」

第九 同 「第六」

第十 同 「〔十三〕第十」

第十一 同 「〔十三〕第十四」

第十二 同 「〔十三〕第十六」

紙箋二枚

一枚 墨書「紫石遍珠 四顆」

一枚 同 「和香五兩一分大十裹」

魚骨笏

墨書「宮」「延喜五年五月廿日□□□□」

檜合子身

底裏墨書「承和四年十月十日」

勘定鈴數百口

預諸天連昨万口^(口)

檜曲物蓋

墨書「銀貳佰伍拾捌兩壹分加大刀定

雜羅琬壹口^{長久元年}
十二月廿七日

加入白盤參枚

慶長櫃

蓋裏墨書「三藏御修理從征夷大將軍

右府家康公被仰付造立畢

並長持卅二箇被成御寄付者也

慶長八年卯癸
菊月吉日

御奉行 本田上野守
大久保石見守

慶長八年徳川家康三藏の修理を命じ併せて宝物保存のため長持三十二箇を寄附した。慶長櫃と称するもの即ち是である。今古裂類断爛及び几櫃残闕雜材並に葛箱柳箱残闕等を分納してある。

元祿 櫃第七十一号

蓋表墨書「繪屏風 式拾七枚 此箱拾八枚自公儀御
此箱自寺中修覆」

同裏墨書「元祿六癸酉
載五月十六日御

開封御屏風及損壞故

從征夷大將軍源綱吉公

被加御修覆者也

別當勸修寺濟深二品親王

奉行兼檢使神尾飛騨守元知

大経師洛陽降屋内匠正廣

元祿六年三倉御開封日記に京都の大経師内匠に命じ銀高一貫四百五十目を以て鴨毛屏風并繪屏風十八枚修理のこと、および同年五月二十七日修復成るにより金珠院より新調箱に入れ宝庫に還納のことが記されている。この元祿櫃はこの時新調のものである。

黄熟香箱長持

蓋表墨書「黄熟香^{東大寺}
正介院」

同裏墨書「三倉御修理從

征夷大將軍右府源綱吉公

被 仰付畢依之兩種御香

内外箱其外宝物小箱等新

調被為寄附者也

元祿六癸酉載八月七日

御奉行兼檢使

從五位下神尾飛騨守藤原元知

全浅香箱墨書もまた同じ。当時黄熟香と全浅香（紅沈香と称す）を兩種の御香として珍重されたものである。